第15回

小さな助け合いの物語賞

エッセー 作文 募集

どなたでも応募できます

「私も見つけた、小さな助け合い。」

あなたの体験をストーリーにしてみませんか。

応募期間 2024年 6月1日(土)～9月6日(金)

※9月6日(金)必着

協賛 全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金

後援 金融庁・文部科学省・金融広報中央委員会

学校からの団体応募には、参加賞をプレゼント

上位入賞作品は、パラパラ漫画による動画を制作。「しんくみバンク公式YouTubeチャンネル」で公開予定！

Shinkumi Bank 信用組合 しんくみ ちかくにいるから、チカラになれる。

“しんくみバンク”信用組合は「助け合い」から生まれた金融機関。
この懸賞作文を通じて「助け合い」の心が広まることを願っています。

第15回「小さな助け合いの物語賞」エッセー・作文募集

テーマ	**実体験をもとにした「小さな助け合い」** ●誰かに助けてもらったときの感謝の気持ち ●助けたことで得られた豊かな心 (家族や友人、同僚など身近な関係での助け合いは対象外となります)
文字数	800～1200文字
応募期間	2024年6月1日(土)～9月6日(金) ※9月6日(金)必着
応募方法	●郵送・メール:専用の応募用紙を作品と併せて応募ください。 ●応募フォーム:応募サイトより直接応募ください。 ※応募要項・応募用紙・応募フォームは応募サイトに掲載しています。 一般社団法人 全国信用組合中央協会 応募サイトはこちら
応募先	郵送:〒105-7208 東京都港区東新橋1-7-1 汐留メディアタワー 8F「小さな助け合いの物語賞」応募事務局 メール:tasukeai@shinyokumiai.or.jp メールタイトルは「助け合い応募」としてください。 郵送・メールによる応募の際は、必ず応募用紙を添付してください。
賞の種類	作品賞 しんくみ大賞:最優秀賞 1編／賞状・副賞(商品券20万円分) 作品賞 しんくみきずな賞:優秀賞 1編／賞状・副賞(商品券10万円分) 作品賞 未来応援賞※:青少年を対象に、今後の人生のプラスとなるような出会いや助け合いを描いた作品 2編／賞状・副賞(図書カード5万円分) ※未来応援賞は、18歳以下(2025年3月31日時点)に贈られる賞です。 作品賞 ハートウォーミング賞:助け合いから生じる人に対する思いやり、やさしさが感じられる作品 最大15編／賞状・副賞(商品券1万円分) 学校賞 徳育奨励賞※:応募数の最も多かった学校 1校／賞状 ※徳育奨励賞は多くの学校に受賞機会を設けるため、受賞は 1 回限りです。
選考・発表	審査結果は10月中に主催社ホームページにて入賞者の作品・氏名・学校名を発表します。上位入賞者は10月18日(金)に東京で行われる全国信用組合大会で表彰します。(徳育奨励賞も含む)
注意事項	応募要項の注意事項をご確認のうえ、応募ください。
主催	一般社団法人　全国信用組合中央協会
協賛	全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金
後援	金融庁・文部科学省・金融広報中央委員会

信用組合使用欄

物語をあなたにお届けします。

昨年の受賞作品2編をご紹介します。
誰かが誰かを助けた小さな「物語」が、あなたの心を温めてくれたなら、
次はあなたの「物語」を届けてください。

しんくみ大賞

私の大好きな町

佐伯　理奈

「スミさーん、大丈夫？　私が運ぶよ。」私は前を歩いている荷物を持ったおばあさんの背中に声をかけた。「あ、理奈ちゃん、おかえり。」スミさんが振り返って、立ち止まった。私は小走りで近寄り、スミさんが手に持っていたエコバッグを預かった。2リットル入りのミネラルウォーターのペットボトルがちらっと見えた。「あらあら、重かったでしょ？　じゃあ、行こう。」私はそう言って、スミさんと歩き出した。

この町で生まれ育った私には、挨拶を交わす「ご近所さん」がたくさんいる。「あ、理奈ちゃん。今日もお疲れ様です。」スミさんのエコバッグを持つ私を見て、敬礼しながら声をかけてくれたのは高木さんだ。

「ただいまです。お荷物運搬中です。」私がおどけて答えると、高木さんは、「理奈ちゃん、病院の予約、しっかり取れていたよ。」とおっしゃった。高木さんが通院している病院は、診察時間のインターネット予約が可能になったが、予約の取り方が分からない高木さんは、今まで通り、朝一番に病院に行って並んでいたらしい。数日前にその話を聞いた私は、高木さんのスマホで一緒に「診察予約の練習」をしたのだ。「お！　良かったです。分からなくなったらいつでも聞いてください。」私は、ガッツポーズで応えた。スミさんも、「私も、前に理奈ちゃんにワクチンの予約を取ってもらったのよ。混雑で電話が全然つながらなかったからね。あのときはありがとう。」と私の腕を優しくさすりながら言ってくださった。

近所に住む方とこういった関わりを持つ私のことを「えらい」と感心してくれる人もいるかもしれない。しかし、私は一方的に「助けている」わけではない。私の方こそ、ご近所さんに長年「助けられている」のだ。スミさんは、毎朝、家の前を掃除しながら駅に向かう私に挨拶してくださる。高木さんは、私が帰ってくる時間に庭で水撒きしながら声をかけてくださる。「カラスがゴミを荒らさないように見張ってるの。」「夕方になってからじゃないと暑くて水も撒けないや。」なんておっしゃるけど、私を見守ってくれているのだ。小学生のころから電車通学している私は、地域の学校に通う子どもたちと違っていつも一人で歩いていた。そんな中、毎朝挨拶してくださったスミさん。優しい笑顔で声をかけてくださった高木さん。ほかにも、「何かあったら、うちまで走っておいで。」「暑いね。顔が真っ赤だから、ちょっと休んでいきなさい。」と、地域の皆さんが助けてくださったから、守ってくださったから、事故に遭うことも怖い出来事に巻き込まれることもなく、今日まで過ごせたのだと思う。

だから、私はご近所さんたちを一方的に「助けている」のではない。「助けている」ようで「助けられている」。そう！　「助け合い」という言葉が一番しっくりくる。「助け合い」そうつぶやくと、ご近所さんたちの笑顔が浮かんでくる。私はこの町が大好きだ。

しんくみきずな賞

母のハグ

西尾　香織

あれから何十年経っただろうか。当時の私は、今で言う完全ワンオペ育児。19歳で母を亡くし、天涯孤独の身になった私が、2人の娘の母となり、毎日をただこなすことだけが精一杯の毎日。なんとも頼りない母親だったと思う。そんな余裕の無さは、積み重なる様に、私から笑うことも、何かを普通に感じることも奪っていった。

そんな日々の中で、娘達を連れて近所のスーパーに通うのが日課だった。当時のスーパーのレジは、2人体制。まだ、古き昭和の流れを残すそのスーパーは、店員さんとお客さんの距離も近く、レジを打ちながらも「こんにちは」「今日は暑いね」なんて日常会話は当たり前、近所で誰がどうしたと、まるで商店街のノリのスーパーマーケット。

その中にその人は居た。毎日通う私を覚えてくれたのか、最初は娘達に話しかけてくれ、それから次第に私にも。どちらかと言うと、シャキッとしたタイプのその人は、これまたテキパキとレジの仕事をこなしながら、「いつも大変だね。お母さん頑張ってるね」といっぱいいっぱいの若い母親を見かねたのか、応援の言葉をくれる様になった。そんな言葉が、まるで亡くなった母が投げかけてくれる様な気がして、私はその人のレジに並ぶ様になった。

そんなある日、とある事件が起こり、一晩中泣いて、泣き腫らした目でレジに並ぶと、その人は私の様子に気が付いたのか「今度、うちにおいで、あり合わせだけど私の作るチャーハン美味しいから、食べに来て」と。それから程なく、私はその人の家にお邪魔することになった。台所に立って、私に背を向けながら、その人は自分が2人の娘の母であることや自分の生い立ちを話し始めた。自分と何処か違う様で、似てるその人の話に耳を傾けていると、目の前に、なんとも良い香りが漂う美味しそうなチャーハンが置かれた。そのチャーハンを見ていたら、何故か私はポロポロと泣いていた。それからは、息急き切った様に自分のことを話した。その人は、そんな私を黙って抱きしめてくれた。そのハグは、世界で一番強く、優しく感じた。自分の中に積み重なった重い荷物が、涙と一緒にこぼれ落ちて行く様で心が軽くなったことを今でも忘れない。それから私は、その人を「お母さん」と呼ぶ様になった。

あの時幼かった娘達も、30代となり、1人は命と向き合う仕事に就き、1人は、命を宿し、今秋母となる。私はおばあちゃんになるのだ。あの頼りない母の元に生まれ、本当に立派に育ってくれたと思う。それもあの時、私を黙って抱きしめてくれた今世のもう1人の母が居てくれたから。「お母さん」あなたは、私に強く優しい母を教えてくれた。ありがとう。来春、私は産まれた孫と、いつものカーネーションを持って逢いに行きます。

第14回上位入賞作品を原作としたパラパラ漫画動画はこちらをご覧ください

他入賞作品はこちらをご覧ください